

自 己 評 価					学 校 関 係 者 評 価
重点課題	重点目標	評価指標と活動計画		評 価	
1 進路指導の充実 〔進学課〕 〔就職課〕	Ⅰ) 望ましい進路観・勤労観の育成を図るとともに、明確な進路目標を設定させる。 Ⅱ) 進路指導に必要な情報を迅速に収集し、計画的・組織的な進路指導を行う。 Ⅲ) 個々の生徒に適した進路を開拓するとともに、自己実現を目指すキャリア教育を推進する。	評価指標	評価指標の達成度	総合評価 (評定) B (所見) 保護者との連携を密にし、個人面談・進路志望調査を通して、生徒の進路志望を把握した。 補習や英語検定、漢字検定、数学検定、全員受験の模試には十分な取組はできたが、進学への意欲喚起や希望者受験の模試受験者を増やすため、将来の具体的なビジョンを持たせる指導強化が必要である。	次年度への課題と今後の改善策 国公立大学や難関私立大学を目指し様々な取組を展開していく必要がある。特に大学入学共通テストの電子登録や模試運営のIT化に伴う進路指導体制の構築が急務である。 総合型・学校推薦型、各推薦入試への対応を進めるとともに、最後まで粘ることができる生徒を育てていく必要がある。そのためにも、さらなる生徒の意識改革が重要である。一人でも多くの補習参加者が得られるように努めていかなければならない。 進路相談も担任中心だけでなく、各ポジションで教員が連携し、より良い進路指導に繋げる必要がある。
		活動計画	活動計画の実施状況		
		Ⅰ) ・国公立大学合格者30名以上。 ・本校に進学して良かったと思っている生徒の割合90%以上。 ・本校に進学させて良かったと思っている保護者の割合90%以上。 ・進路ガイダンスや進路講演会などの行事が進路意識の高揚につながっていると思う保護者の割合80%以上。 ・進路希望が明確な生徒の割合1年次90%以上、2年次95%以上、3年次98%以上。 Ⅱ) ・三者面談や年次別PTA等は十分に行われていると思う保護者の割合80%以上。 Ⅲ) ・インターンシップ・校外体験学習の参加者が70名以上。	Ⅰ) ・合格者は、国公立大学(25名)私立大学(182名)私立短期大学(8名)専門学校(57名)であった。(3/10現在)同志社大学、立命館大学等の県外私立大学への進学者の増加、看護医療系方面への進学者も増加した。 就職者は、15名(内2名は公務員)。 ・本校に進学して良かったと思う生徒の割合は93%。 ・本校に進学させて良かったと思う保護者の割合は89%。 ・進路ガイダンスや進路講演会などの行事が進路意識の高揚につながっていると思う保護者の割合は72%。 ・進路希望が明確な生徒の割合1年次91%、2年次92%、3年次95%。 Ⅱ) ・三者面談や学年別PTA等は十分に行われていると思う保護者の割合は85%。 Ⅲ) ・インターンシップ、校外体験学習の参加者は59名。	総合評価 (評定) B (所見) 保護者との連携を密にし、個人面談・進路志望調査を通して、生徒の進路志望を把握した。 補習や英語検定、漢字検定、数学検定、全員受験の模試には十分な取組はできたが、進学への意欲喚起や希望者受験の模試受験者を増やすため、将来の具体的なビジョンを持たせる指導強化が必要である。	次年度への課題と今後の改善策 国公立大学や難関私立大学を目指し様々な取組を展開していく必要がある。特に大学入学共通テストの電子登録や模試運営のIT化に伴う進路指導体制の構築が急務である。 総合型・学校推薦型、各推薦入試への対応を進めるとともに、最後まで粘ることができる生徒を育てていく必要がある。そのためにも、さらなる生徒の意識改革が重要である。一人でも多くの補習参加者が得られるように努めていかなければならない。 進路相談も担任中心だけでなく、各ポジションで教員が連携し、より良い進路指導に繋げる必要がある。
		Ⅰ) ・夏季休業中に三者面談を実施する。 ・補習を充実させる。 ・1・2年次生に対して、校外模試を年間5回以上実施する。 ・大学入学共通テストに向けた実践トレーニングを行う。また、プレテストを、会場である鳴門教育大学で実施できるよう関係機関と調整する。 ・資格取得を奨励する。 ・生徒が主体的に進学先を研究する姿勢を身に付けさせる。 ・進路ガイダンスを実施する。地元大学、専門学校との連携を強化する。 ・進路志望調査を年2回以上実施する。 Ⅱ) ・年次別PTAを実施する。 ・個人面談を充実させる。 Ⅲ) ・公務員希望生徒対象の説明会を本校で開催実施する。(自衛隊・県警・地方公共団体) ・インターンシップ・校外体験学習の参加を促す。	Ⅰ) ・各年次で三者面談並びに適宜個人面談を実施した。 ・1年を通して放課後補習(45分)を実施した。また、夏期・冬期・春期及び2次対策補習等を実施した。(補習出席率は1年次81.3%、2年次79.2%、3年次78.5%) ・1・2年次生の校外模試を年間6回実施。部活動の大会等で当日受験できない者に対して、別日程で受験できるように配慮した。 ・「鳴高プレテスト」を3回実施した。 ・英語検定、漢字検定、数学検定の受験を奨励。英検222名、漢検58名が受験した。1月現在で英検46名、漢検14名が合格。数検は、学校実施最低人数を満たさず実施できず。(最終合否は3月中旬) ・2年次は、学部別ガイダンス27講座開催。 ・3年次は、学部別ガイダンス17講座開催。 Ⅱ) ・年次別PTAを3年次1回、1・2年次2回実施した。 ・面接週間を利用して面談を実施した。 Ⅲ) ・公務員希望者が少なかったため、本年度の公務員説明会は、実施せず。 ・インターンシップ・校外体験学習はほぼ昨年と同数の生徒が参加できた。		学 校 関 係 者 の 意 見 鳴門教育大学への進学が、昨年度に比べて増えたものの、今後、鳴門高校から鳴門教育大学への進学がますます増加することができるよう、Educatinプログラムを活用しながら取り組んで欲しい。

2 学習指導の改善 〔教務課〕 〔情報課〕	I) 教職員の指導スキルの向上に努め、「主体的・対話的で深い学び」の推進を図る。 II) 生徒の学習意欲を喚起する指導方法・指導体制の工夫・改善を図る。 III) I C T の活用等により、多様な生徒に個別最適化された学びの実現を目指す。	評価指標	評価指標の達成度	総合評価 (評定) B (所見) 生徒が家庭学習をしていると感じている保護者の割合と、授業で出された課題に意欲的に取り組み提出できている生徒の割合は、ともに昨年度より減少した。保護者の感覚と生徒の回答が一致した形となった。しかし、家庭学習をしていると回答した生徒の割合は昨年度よりも増えているため、この結果を学習意欲の低下と結びつけるのではなく、課題の内容を精選して、生徒が意欲的に取り組めるような工夫をしたり、提出を粘り強く促す指導をしたりすることが必要である。 4月から7月にかけて段階的に生徒1人1台端末の整備が進められ、I C T を活用した授業が展開された。	次年度への課題と今後の改善方策
		活動計画	活動計画の実施状況		学校関係者の意見
		I) ・先生の説明が分かりやすいと思う生徒の割合90%以上。 ・授業に主体的に取り組み、学ぶことができて、いると感じる生徒の割合80%以上。 II) ・単位制による多くの科目選択や少人数授業等が充実していると思う保護者の割合80%以上。 ・家庭で予習・復習やテスト勉強を計画的にしていると思う保護者の割合70%以上。 ・授業で出された課題に意欲的に取り組む事ができ、提出できている生徒の割合90%以上。 III) ・電子黒板や生徒1人1台端末等のI C T を活用した授業が展開され、学習の理解に役立っていると思う生徒の割合80%以上。	I) ・先生の説明が分かりやすいと思う生徒の割合91.4%。 II) ・単位制による多くの科目選択や少人数授業等が充実していると思う保護者の「そう思う」「ややそう思う」の割合は83%となり、昨年度と同様の結果を得ることができた。 ・家庭で予習・復習やテスト勉強を計画的にしていると思う保護者の割合は57%となり、昨年度よりも2%減少した。 ・授業で出された課題に意欲的に取り組み、提出できていると答えた生徒の割合は80.1%で、90%を超えていた昨年度より大きく減少した。 III) ・電子黒板や生徒用学習端末等のI C T を活用した授業が展開され学習の理解に役立っていると思う生徒の割合82.2%。		家庭学習時間については、昨年度より生徒の回答が大きく増加したため、計画的な学習習慣が身に付くような指導を引き続き実施したい。 週末課題や各授業での提出課題等の状況については、80%という結果であり、決して高いとは言えない。地道に取り組むことで、学力が身に付いていると実感できるような課題となるようさらに工夫・改善することが今後の課題である。
		I) ・教員相互の参観授業を年2回実施する。 ・教科会・年次会で学力向上に向けて検討する。 ・高大連携事業を行う。 II) ・多様な学校設定科目を設ける。 ・課題学習の習慣化を図る。 III) ・共通アプリケーション、授業及び学習方法、危険管理対策、端末の運用管理等について職員研修を実施し、全教員が生徒1人1台端末を活用した授業を行う。	I) ・教員が年2回程度ずつ、相互に授業を参観した。 ・日常的な取組の中では日々検討しながら授業実践をしているものの、教科会・年次会という枠組みの中では、学力向上に向けて検討する機会をあまりもてなかった。 ・鳴門教育大学の先生による出張講義を11月、12月の2回実施した。 II) ・ユニバーサルデザイン、伝統文化、チャンピオンスポーツなどの多様な学校設定科目を設け、生徒の適性や興味・関心、進路希望に応じて、幅広く科目選択をすることができるようにした。 ・週末課題や各授業での課題を通して、学習習慣が定着するよう取り組んだ結果、家庭学習をしている生徒の割合が昨年度より10%増加した。 III) ・総合教育センターのオンラインによる教職員研修を実施し、生成A I の活用方法や活用にあたって注意すること等を研修した。また、本校職員による教職員研修も実施し、Microsoft Teamsを授業に活用する方法を研修した。 ・生徒1人1台端末が、再配備され授業においての活用を進めていくことができた。		中学校では、「家庭学習が出来ている」という保護者アンケートの結果では62%と低調である。高校においても、家庭学習の増加が課題であると思われるが、その解決策の一つとして、タブレットの持ち帰り、例えば「A I ドリル」を活用するなどし、課題である家庭学習の増加に努めて欲しい。

3 生徒指導の充実 〔生徒指導課〕 〔教育相談課〕	I) 生徒一人一人との関わりを大切に丁寧な指導を通して、教師と生徒の信頼ある関係を構築する。	Ⅰ)・校則や決まりを守っていると思う生徒の割合 9 0 %以上。 ・遅刻件数 年間 1, 0 0 0 件以下。 ・毎日あいさつをする生徒の割合 7 5 %以上。 ・校則違反等の特別指導対象生徒 5 名以下。 ・自転車事故 2 0 件以下。	Ⅰ)・学校生活全般やアンケート等からほとんどの生徒が校則や決まりを守っていると推察できる。 ・遅刻件数 1, 6 8 6 件 (2 月末)。 ・自ら挨拶をする生徒の割合 7 1 %。相手がしたら挨拶する生徒の割合 2 7 %。 ・特別指導件数は 4 件、7 名 (昨年度 5 件、8 名)。 ・自転車事故は 2 0 件 (昨年度 2 5 件)、交通マナーに関する苦情は 1 4 件 (昨年度 1 9 件)。	(評定) A (所見) 今年度は、生徒が主体となったいじめ防止活動 (いじめやめん会) やいじめ防止授業等を行ったこともあり、悩みを相談できる人の割合が 8 8 % (令和 2 年度 8 6 %) に向 上し、落ち着いた学校生活を送っている。また、生徒生活意識調査のアンケートで毎日あいさつをする生徒が 7 1 %と向上した。(令和 2 年度 6 2 . 9 %) 服装指導については、身だしなみ指導やマナーズウィークを活用し、月ごとのテーマを設定し全教職員で粘り強く取り組み、一定の成果を挙げている。 クロスバイク等の使用者は増加したものの、自転車事故の件数は減少した。ヘルメット着用についての啓発を行うことで、ヘルメットの着用者数は少しずつ増えてきている。(1 8 名着用) スマートフォンや携帯電話については、意識調査のアンケートの中では、利用時間が増えているなどの課題がある。特に 5 時間を越える生徒の割合が増加した。(平日 1 4 %、休日 3 3 %) 講演会等を実施し、スマートフォンの使用方法についての指導を継続する必要がある。 教育相談に関しては、多々席調査やチェックリストを活用し、支援の必要な生徒の状況を把握し、スクールカウンセラーへの相談につなげることができた。また、年次会や職員会議での支援の必要な生徒への対応策の提案や、ストレスマネジメント研修等により、教員の共通理解が図られたことで、生徒や保護者からの相談への対応力が向上し、相談支援体制との充実につながった。 一方、入学までに不登校を経験してきた生徒の中には、集団になじめなかったり、長時間学校で過ごすことにしんどさを感じていたり、不登校状態が改善されなかったケースもあり、課題が残った。	いじめ防止委員会や委員会活動等、生徒が主体となって活動する取り組みが増えてきた。あいさつを進んでする生徒も増加しており、今後も継続した指導に取り組んでいきたい。 「身だしなみ指導」については、生徒・保護者・学校が情報を共有し、連携を密にすることが重要である。 立哨指導や集会・講演会などを通して、交通安全の意識向上を図る必要がある。また、朝の登校指導やヘルメット着用の啓発運動も引き続き行っていくたい。 スマートフォンによるトラブルについてはは少なくなったが、使用時間や SNS の危険性や利用の仕方等について、引き続き講演等を活用し指導の徹底を図りたい。 教育相談に関しては、今後も各種調査等を活用し、支援の必要な生徒の早期発見に努め、支援への流れをスムーズにしていきたい。また、スクールカウンセラーと共にストレスマネジメント講座を実施することで、生徒のストレス軽減につなげていきたい。その上で、不登校を経験して入学してきた生徒については、本人や保護者との面談を通して必要な支援を早期に開始し、高校での不登校状態が減少するように努めたい。	
	Ⅱ) 家庭、中学校、関係諸機関との連携を密にすることで、問題行動を未然に防止する。	Ⅱ)・鳴門高校生は校則やきまりを守っていると思う保護者の割合 7 5 %以上。 ・学校から配布される書類等が保護者の手に届く割合 8 0 %以上。	Ⅱ)・鳴門高校生は、校則やきまりを守っていると思う保護者の割合は 7 5 % (昨年度 7 3 %)。 ・学校から配布される書類等が保護者の手に届く割合は 6 8 % (昨年度 7 1 %)。			
	Ⅲ) 教育相談活動を充実させることで、不登校等の未然防止や支援の必要な生徒の早期発見に努める。	Ⅲ)・教員対象に生徒の学校生活に関するチェックリストを年 2 回実施。 ・スクールカウンセラーの活用促進。 ・悩み事が相談できる人がいる生徒の割合が、8 5 %以上。	Ⅲ)・教員対象に支援の必要な生徒の学校生活に関するチェックリストを年 2 回実施し、スクールカウンセラーへの相談の呼びかけや、生徒の支援に役立てた。 ・悩み事を相談できる人がいる生徒の割合は、全年次の平均で 8 8 %であった。 (1 年次 8 9 %、2 年次 8 9 .1 %、3 年次 8 5 .6 %)			
	活動計画	Ⅰ)・生徒指導に関する共通理解を図る。 ・運転免許取得事前講習会 年間 4 回実施。 ・鳴門市・小中学校と連携し、ヘルメット着用や自転車マナー等の啓発運動を年 2 回実施。 ・合格者説明会や入学式、PTA 総会などにおいて、保護者に生活指導についての理解と協力を依頼。 Ⅱ)・毎月 0 のつく日に駐輪指導を実施する。学期に 2 回立哨指導実施。 ・集会や立哨指導でヘルメットの着用・交通安全の啓発、指導の実施。 ・交通安全や SNS、公共マナー向上、命の大切さ等に関する講演会の実施。 Ⅲ)・スクールカウンセラーや関係機関と連携し、不登校傾向のある生徒や特別な支援を必要とする生徒に対し、適切な支援の実施。 ・1 年次対象としたストレスマネジメント講座の開催。 ・教職員対象にチェックリストを年 2 回実施し、支援の必要な生徒の把握。 ・教職員対象の研修の実施。	活動計画の実施状況 Ⅰ)・年度当初の職員会議において本年度の重点項目、指導の基準を説明し、校則の見直しや改正点などについての共通理解を図った。3 学期の職員会議で生徒指導についての中間報告を行い、今後の対策について検討した。 ・運転免許取得事前講習会を年 4 回実施。(1 3 5 名の参加) ・ヘルメット着用や自転車マナー啓発運動を年 3 回実施。 ・合格者説明会・入学式で本校の指導方針について説明し、保護者の理解を深めた。また、家庭への啓発文書を年 8 回送付した。 Ⅱ)・学期に 2 回、学校周辺道路の危険箇所において、全副担任・年次付の教職員で立哨指導を行った。また、月に 2 回、駐輪指導を行った。 ・交通委員・部活動生を中心に挨拶・マナー啓発運動を実施。 ・7 月・1 月に鳴門警察署や鳴門少年補導協助力、撫養地区の安全を守る会の方々と協力し、交通安全運動・ヘルメット着用の啓発運動を実施した。 Ⅲ)・生徒の実態調査 (チェックリスト) を年 2 回行い、それをもとに不登校傾向のある生徒や支援の必要な生徒に対して、カウンセリングを勧め、相談につなげた。 ・1 月 1 7 日現在は、別室登校を活用する生徒はいないが、友人関係の悩みから昼休みに教育相談室を利用する生徒はいる。静かに過ごせる場所で昼食をとりながら、関わる教員にも悩みを打ち明けるようになり、落ち着いて生活できている。 ・1 年次対象のストレスマネジメント講座を各ホームルームごとに実施できた。講座後のアンケートでは「呼吸法などストレスの解消方法が知れてよかった」という感想が多かった。 ・教職員対象の研修会でもストレスマネジメントを取り上げ、教員自身がストレスの対処法を学び、生徒への支援に生かすことができるようになった。			学校関係者の意見 JR 撫養駅の使用状況や自転車置き場の評判が非常に良いとの地域からの声がある。他方、何かトラブルが起こると鳴門高校生ではないかという間違っ た捉え方をされているのも現状である。市民の目は鳴門高校に注目しているので、そのことをプラスにして、地域と連携し広報して欲しい。 配付文書の 3 割が保護者に届いていないのは問題である。解決策として ICT を活用するなどしたらよいのではないか。 ヘルメット着用率を向上するため、中学校や警察と連携し、継続して指導して欲しい。

4 特別活動の充実 〔特別活動課〕	I) 部活動や生徒会活動を充実させ、人間性の育成を図る。 II) ボランティア活動の推進に努め、豊かな心と地域に貢献できる生徒の育成を図る。	評価指標	評価指標の達成度	総合評価	次年度への課題と今後の改善方策
		活動計画	活動計画の実施状況	(評定) A (所見) 昨年度は、多くの行事で新型コロナウイルス感染拡大以前の実施形態に戻したが、順調に実施することができ、今年度はその経験をいかしてより充実した取り組みができています。今後も生徒が主体的に活動できる学校行事の運営を目指し、行事内容の見直しや内容の効率化・簡略化を図ることができるよう取り組んでいきたい。 部活動においては、入部率87.6%(昨年度87%)と昨年に続き、高い入部率を維持している。日々の活動も活発で、顕著な成績も残すことができています。 行事運営においては、予定通りに実施できた。今年度も課会議を効果的に行うとともに、生徒アンケートを考慮して計画・運営した結果、充実した内容となった。	次年度への課題と今後の改善方策
		I) ・部活動および学校行事に関するアンケートの充実度85%以上。 ・高校総体や高校文化祭に関する壮行会の実施率100%。 ・全ての部活動において、取組を学校ホームページで広報する。 II) ・各種セミナーやボランティア学特講などの体験活動に関する学校評価アンケートの充実度80%以上。	I) ・学校評価アンケート(保護者用)では、部活動と生徒会活動が活発に行われているという割合が88%と昨年度(88%)と同様に高い水準であった。 ・壮行会については、全て体育館で実施することができた。 ・ホームページは、各部ごとに効果的に更新し、広報活動を行っている。 II) ・年間を通して計画的に運営を行い、ボランティア学特講は4回実施した。(昨年度も4回実施)参加した生徒は、どの活動も熱心に取り組み、充実感を感じる生徒がほとんどであった。		部活動では、文化部・運動部ともに入部率が高い。これまでの取り組みを継続するとともに、生徒が主体的に活動できる部活動運営を目指すため、部活動適正化委員会も効果的に実施していきたい。 ボランティア活動についても、積極的に取り組むための企画・運営を工夫し、効果的に実施していきたい。 生徒会活動では、生徒会役員が主体的に活動できる場面が徐々に増え、今年度は意欲的に取り組むことができた。今後も生徒会活動の充実が図れるよう、生徒と担当教員の連携を図り、計画・運営を工夫していきたい。
		I) ・ホームページなどを活用し、部活動や生徒会活動に関する情報の発信を積極的に行う。 ・対面による壮行会を効果的に行い、各種壮行会の充実を図る。 II) ・セミナーや体験活動の案内を積極的にを行い、振り返りのレポートをもとに行事の計画・運営の改善を図る。	I) ・今年度も四国大会や全国大会に出場する部活動が多く、県総体では陸上競技部(女)となぎなた部が優勝した。硬式野球部は秋の県大会で3位となり、四国大会でもベスト8に入った。また、陸上競技部は全国総体で2名の選手が3位・4位に入賞、国スポで個人6位・リレー6位(本校部員1名が県代表で出場)で入賞、U20日本選手権で3位に入賞、全国高校駅伝出場するなど活躍した。 ・壮行会については、全て体育館で実施することができた。落ち着いた雰囲気を実施することができ、生徒にとって良い取り組みとなっている。 II) ・年間を通して計画的に運営を行い、振り返りのレポートにより効果的にフィードバックすることができた。		多くの部で素晴らしい成果を残すことが出来て。次年度も継続して取り組んでいただきたい。
5 人権教育の推進 〔人権教育課〕	I) 全ての人の人権を尊重し、多様性を認め、ともに支え合う仲間づくりを推進する。 II) さまざまな人権問題の解決に向けて、主体的に行動できる実践力を培う。	評価指標	評価指標の達成度	総合評価	次年度への課題と今後の改善方策
		活動計画	活動計画の実施状況	(評定) B (所見) 30年目となる特別支援学校との交流会は、生徒たちの心の成長を促すと共に、交流校の生徒にも大きな影響があることを知り、継続することの重要性を感じた。 人権学習ホームルーム活動は研究授業をはじめ、生徒たちの心に響く実践ができています。 自主活動では、参加生徒が活力のある実践を展開し、校内外で足跡を残すことができた。 教職員研修の実施により、地域や歴史の知識を習得することにより、身近な人権課題の再発見につながった。	次年度への課題と今後の改善方策
		I) ・板野支援学校との交流会を年2回、のべ100人参加。 ・中高生による人権交流集会へ5回以上参加。 II) ・人権学習HR活動を各年次年間5回実施。 ・教職員人権研修を年間2回開催。	I) ・板野支援学校との交流会を2回実施した。本校での対面での交流は5年ぶりであったが、本校生62名(板野支援学校51名)の参加であった。板野支援学校での交流は本校生20名が参加であった。どちらも、活気と温かみのある交流となった。中・高生等による人権交流事業は計6回参加し、本校生徒が県会長を務めた。 II) ・人権学習ホームルーム活動は各年次年間5回実施。 ・教職員人権研修会は年間2回実施できた。		本校での対面の交流の再開は生徒・教職員ともに実施の意義のある、効果の大きな行事となった。自主活動も含めて、今後も生徒が主体となって成長できるような取組を継続する必要がある。 また、教職員研修により常に研鑽することを心がけ、地域の課題や現状を知りながら校内の人権教育の啓発に推進できるように努力したい。
		I) ・板野支援学校との交流会やヒューマンネットワーク部の活動を通じて、人権が尊重され、温かい人間関係に包まれたホームルームづくり、学校全体の雰囲気づくりに努める。そのうえで豊かな人間性の育成に努める。 II) ・主体的に行動できる生徒を育てるHR活動を実践する。 ・人権教育を教育活動の重要な柱とするために、指導内容や教育方法の研究・改善を行うための研修の充実を図る。	I) ・ヒューマンネットワーク部が中心となって、板野支援学校との交流会を2回実施できた。事前の車椅子講習会をはじめ、生徒が主体的に参加することができた。高校生同士の交流は身体を使っているパフォーマンスから、小さな物づくりまで多様な活動を行い、お互いをよく知る心温かい交流会となった。 II) ・自主活動において主体的に年間を通して活動できる生徒の成長を支援できた。 ・地元の賀川豊彦についての講演を実施し、教職員研修としても、史実を知ることとふるさとや平和・社会運動について知識を深めることができた。		コロナ禍を経て、対面による板野支援学校との交流会が5年ぶりに実現できたことは大変意義深いと感じる。 この素晴らしい取組をヒューマンネットワーク部が中心となって今後も続けて欲しい。

6 環境教育・保健衛生対策の推進 〔環境教育課〕 〔保健厚生課〕	I) 校舎内外の環境美化活動を推進し、道徳心や公共心の育成を図る。 II) 学校における保健衛生環境を整えるとともに、生徒および教職員の健康管理を徹底する。	評価指標 I) ・教室から出るゴミの分別ができているクラスの割合90%。 ・ボランティア学特講の受講者や有志の生徒で、花を植えるなどの校外におけるボランティアに参加する生徒がのべ50人以上。 II) ・「保健だより」の発行を年10回以上行う。 ・健康に関する講座を年3回以上実施する。	評価指標の達成度 I) ・掃除時に教室から出されるゴミは概ね分別できていた。 ・ボランティア学特講の受講者や有志の生徒で、花を植えるなどの校外におけるボランティアに参加した生徒はのべ29人であった。 II) ・「保健だより」の発行を年15回行った。 ・健康に関する講座を年4回実施した。	総 合 評 価 (評定) B (所見) ゴミの分別やボランティアで美化に取り組む参加生徒の人数については目標の数値には届かなかったが、早朝に落ち葉を掃除するなど運動部を中心とした美化活動が実施できていた。 保健衛生面では、感染症対策以外にも、歯科衛生指導や肥満改善指導など、生徒が抱える身近な健康課題について、生徒に寄りそった取組を行うことができた。	次年度への課題と今後の改善方策 主に部活動等から出るゴミの分別はできているとは言えなかった。 南海トラフ地震が危惧されているため、講演会や避難所設営訓練を実施するなど意識の向上を図ってきたい。 引き続き感染症対策を徹底するとともに、健康相談、健康講座などの個別の悩みに対応する取組を充実していきたい。 学 校 関 係 者 の 意 見 南海トラフ巨大地震が起こることを想定し、地域の自主防災組織や幼稚園・保育所、鳴門市と連携して取り組んで欲しい。
		活動計画 I) ・環境委員を中心にホームルームに呼びかけさせ、ゴミの分別に取り組むよう働きかける。 ・ボランティアの案内を全生徒に周知するとともに、関心が高い生徒に個別に知らせる。 II) ・各クラスの保健委員が中心となって、健康に関する様々なテーマを取りあげ、健康意識の向上を促す。	活動計画の実施状況 I) ・生徒総会で環境委員の代表生徒が全生徒にゴミの分別を呼びかけた。文化祭では環境委員が中心になりゴミの分別チェックを行った。 ・ボランティアの案内を全生徒に周知するとともに、関心が高い生徒に個別に知らせた。 II) ・文化祭では、保健委員が中心となり、高校生に身近な健康課題に関する様々なテーマを取りあげ、ポスター展示を行った。		
7 読書活動の推進 〔図書課〕	I) 教科における学習活動と連携した読書活動の推進を図る。 II) 読書習慣を定着させ、生涯にわたって豊かな人生を送る。	評価指標 I) ・教育活動の一環として図書館を活用するよう、1年次を対象としたオリエンテーションを年に1回以上実施。 ・読書感想文の課題本を決める活動を、1・2年次を対象として年に1回以上実施。 II) ・ビブリオバトルやHR読書会を、年に1回以上実施。 ・生徒・教職員による図書の貸出冊数が、年間1800冊以上。	評価指標の達成度 I) ・国語科で1年次対象のオリエンテーションを4月に行い、図書館の利用方法を周知し、実際に貸し出し活動を行った。 ・教科授業やHR活動を図書館で行い、読書感想文の課題本を選んだり、調べ学習をしたりする機会を作ることによって、図書館活用を促進した。12月末時点で授業時の図書館利用は25回であり、昨年度同時期と比較すると、約66%にとどまった。 II) ・7月にビブリオバトルを実施した。参加者36名。HR読書会は、図書課の提示した実践例を参考にして、全年次で10月に実施した。実践結果を報告し共有することができた。 ・図書館の貸出冊数は、12月末時点で1979冊であり、昨年度同時期と比較すると約97%である。	総 合 評 価 (評定) B (所見) スマートフォン等の利便性が高まり紙媒体の本はあまり読まれなくなっている中、授業で図書館を利用したり、図書委員会活動を促進させることで、読書の有効性を幅広く知らせることができた。	次年度への課題と今後の改善方策 インターネットの情報に頼り、書籍による「調べ学習」が減少している。 また一方的に流れる映像に慣れ、活字を読んで思考する習慣が薄れてきている。 利便性が優先され、読書の時間をなかなか取れないことが課題であるが、今年度は図書委員の活動やイベントの充実、ホームルーム活動や授業での図書館利用を充実させ、貸出冊数を同程度に維持することができた。また、令和5年度「読書の生活化プロジェクトVI」において、教育長賞をいただくことができた。以上のことを励みとして、今後も本校生徒の読書活動を深化させていきたい。 学 校 関 係 者 の 意 見 司書を中心として、図書の貸し出しの工夫を行うなど、生徒の目線に立った取組がなされている。
		活動計画 I) ・教育活動の一環として図書館を活用するよう、図書委員による本紹介や展示活動、放送部と協力した読み聞かせ会等を実施して、生徒に働きかける。 II) ・毎月1回「図書館だより」を発行し、新刊や展示を紹介して、図書館を活用するように働きかける。	活動計画の実施状況 I) ・職員・生徒の活動やアンケートに沿って図書を購入し、「図書館便り」や館内展示で紹介した。文化祭では「図書館が美術館」というテーマで、大型本を展示した。文化祭で放送部との連携は取れなかったが、読み聞かせの本を提供することができた。 II) ・図書委員会で、ビブリオバトル・ホームルーム読書会等の図書行事の中心的存在として活動するよう指導した。夏休みに県立図書館で図書委員の推薦書籍紹介が展示された。「図書館便り」を毎月1回発行し、新刊を紹介したり、図書館活用を呼びかけたりした。		

		評価指標	評価指標の達成度	総合評価 (評定) A (所見) 「総合的な探究の時間」では、地元地域、大学などのご協力をいただき、地域の魅力や課題解決策を探究し、地域の活性化につながる探究活動を実施することができた。また学校運営協議会では、本校のスクールミッションを達成するために協議を重ね、いただいた様々な提言を学校運営に役立てることができた。 今年度も実施した鳴教大院生presents「Miraiサポート」、鳴門教育大学教員（教授）の講義（心理学）、鳴門教育大学の施設・設備の有効利用等は、継続していきたい。教員志望の鳴高生の鳴教大授業受講、鳴高リハーサルテストを鳴教大で受験するなど、新しい取り組みを考えている。鳴門教育大学の施設・設備の利用や合同練習も、より多くの部活動で実施したい。	次年度への課題と今後の改善方策 本校のスクールミッション・スクールポリシーが新しくなるが、それらを達成できるように、地元地域、大学などと連携・協働し、学校の課題解決に向けた取組を推進していく必要がある。また、学校運営協議会において幅広い視点から熟議いただいた内容を学校の活性化につなげていきたい。 鳴門教育大学との連携も6年目となり連携事業が定着した。今年度も大学関係者による生徒への講義や鳴門教育大学の施設・設備の利用など、多岐にわたったが、鳴門教育大学院生の受け入れが中心であった。 高大連携推進委員会を開催し、充実した意見交換をさらにに行い、さらなる連携強化に向けての具体的施策を協議していきたい。
		活動計画	活動計画の実施状況		学校関係者の意見 鳴門市役所と連携しているが、「鳴門市教育委員会」とも連携している事案が多く、記載の仕方を工夫して欲しい。 次年度、Educatin プログラムが実施されるが、奨学金制度が実現したのも鳴門市教育委員会と連携している要素が大きいのと思われる。現在10人以上の申込みがあり協力していく。今後、連携を深めるためにも、鳴門高校から積極的に要望や依頼をして欲しい。そのことにより、様々なことが実現していくと考えられるので、待たない姿勢でアプローチして欲しい。 PTA活動において、テーブルマナー講習会は2年連続参加希望人数不足により実施できていない。行事自体見直しが必要であるという視点も重要であるが、呼びかけの仕方の工夫がある。
8 開かれ信頼される学校づくりの推進 〔企画推進課〕 〔総務課〕 〔進学課〕	I) 地域人材などの地域の教育力を活用し、地域と一体となって生徒を育成する。	I) ・地域の人々や鳴門市役所、鳴門教育大学と連携し、講座や講演等を年に3回以上、フィールドワークを年1回実施、また学校運営協議会を年3回実施。	I) ・地域の方々、鳴門市役所、鳴門市地域おこし協力隊、鳴門教育大学などと連携し、1・2年次を対象とした講演・講座等を10回以上実施した。また、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を年3回（6月・11月・3月）実施した。		
	II) PTA・同窓会との連携を図り、ホームページ等の情報発信や教育活動の公開を積極的に推進する。	II) ・PTAの行事である総会・県外大学視察・体育祭ジュース販売・テーブルマナー講習会等の案内と実施報告をホームページ等で情報発信し、総会参加者200人以上、その他各行事の参加者10名以上。	II) ・PTAの行事である総会・県外大学視察・体育祭ジュース販売・テーブルマナー講習会等の案内と実施報告をホームページ等で情報発信することができた。総会参加者が214名、県外大学視察（立命館大学）の参加者が9名、体育祭ジュース販売の参加者は10名だった。		
	III) 大学院生・学部生との関わり等を通して、鳴門教育大学との連携を進める。	III) ・進学や教職を目指す生徒の意識づけとして鳴門教育大学大学院生のフィールドワークを年間2回（1回15日以上）受け入れ。 ・鳴門教育大学大学院生による学習支援として、フィールドワーク中のT T授業や、放課後の「Miraiサポート」（個別補習）を週2回実施。 ・各種部活動の競技力向上を目指し、鳴門教育大学の施設・設備を年10回以上利用。	III) ・鳴門教育大学大学院学校教育研究科専門職学位課程高度学校教育実践専攻の実習生を受け入れた（19名）。 鳴門教育大学院生から、HR活動や授業、放課後などの時間に進路に関する体験談を話してもらい、質問に答えていただいた。 ・鳴門教育大学院生による学習支援教室（名称：鳴教大院生presents「Miraiサポート」）を数学・地歴公民で週2回放課後に実施した。（毎週2回） ・ラグビー部、テニス部、ハンドボール部（女子）において、各部とも月平均2～3回程度鳴門教育大学の施設を利用し、合同練習等を行った。		
		I) ・1年次を対象に地域のボランティアガイドによるフィールドワーク、1・2年次を対象に鳴門市役所や鳴門教育大による出前講座や講演を実施する。また、学校運営協議会を通して生徒の育成や学校の活性化に向けて協議する。	I) ・なると観光ボランティアガイド会にご協力をいただき、5月に1年次を対象としたフィールドワーク「撫養街道を歩く」を実施した。また、鳴門市役所の出前講座（1・2年次対象）や鳴門市地域おこし協力隊の講座（2年次対象）を実施した。学校運営協議会では、本校の取組や令和7年度から始まるEducationプログラムについて協議しご意見をいただいた。		
		II) ・それぞれの行事の案内を担当の先生に協力して頂き出欠確認し、保護者全員に案内文書が手元に届くように徹底させる。 ・写真撮影の担当者をきちんと決めて依頼し、各行事ごとに活動内容をホームページ等で情報発信する。	II) ・それぞれの行事の案内を担当の先生に協力していただき出欠確認し、保護者全員に案内文書が手元に届くようにほぼできた。 ・写真撮影の担当者をきちんと決めて依頼し各行事ごとに活動内容をホームページ等で情報発信することができた。		
		III) ・フィールドワーク期間中の鳴門教育大学大学院生によるT T授業や、放課後週2回の個別補習「Miraiサポート」を実施し、学習支援をする。 ・鳴門教育大学大学院生の担当ホームルームで、進路に関する体験談の時間を設ける。 ・テニス部、ラグビー部、ハンドボール部等において、鳴門教育大学の施設を利用し、合同練習を行う。	III) ・1・2年次生希望者を対象に、鳴門教育大学院生による学習支援教室を5月・6月・9月・10月に週2回放課後に実施した。（数学、地歴公民） ・鳴門教育大学院生から、ホームルーム活動や授業、放課後などの時間に進路に関する体験談を話してもらい、生徒からの質問に答えてもらった。 ・ラグビー部、テニス部、ハンドボール部（女子）において、鳴門教育大学の施設を利用し、合同練習等を行った。		

9 消費者教育・主権者教育・防災教育の推進 〔各担当〕	I) 身近な消費生活やエシカル消費について学ぶ機会を充実させ、自立した消費者の育成に努める。 II) 主権者として社会の中で自立し、他者と連携・協働しながら、社会を生き抜く力を育成する。 III) 地域と連携した安全・防災教育の推進に努め、災害時における実践力の育成を図る。	評価指標	評価指標の達成度	総合評価 (評定) B (所見) 消費者教育に関しては、外部機関に加え、公民科と家庭科との連携を図ることにより、多様な方面から学習を進めることができた。 エシカル消費については家庭クラブとの連携により、外部講師を招いての研修会を開き、身近な生活の中から、自分たちにできることを考え、実践していこうとする意識を高めることができた。 主権者教育に関しては、2年次の公共の授業内で、ポートマッチを活用した各政党の政策比較を実施した。「どこに、誰に投票すればよいかわからない」という若年世代にとって、選択・判断の手掛かりを得ることができた。 徳島ぼうさい選手権で様々な技術的なことを学ぶことができた。 天候のため今年度実施できなかった保育園と幼稚園と連携した避難訓練を実施したい。 普通救命講習を通して、技術の習得と命について考えを深めることができた。	次年度への課題と今後の改善方策 消費者教育に関しては、キャッシュレスや金融経済、税制の変化等、社会の変化によって変わってくる内容が多く、2024年は新NISAの普及により、誰もが簡単に投資をする時代となったといえる。卒業後、生徒が様々な情報から、自分に必要なものを取捨選択する力を育てる学習を今後も展開していく必要がある。 主権者教育に関しては効果的、効率的な成果が出るよう、各関係機関との連携を図り、出前講座の実施時期や内容を単元計画に位置付けていく必要がある。日程調整の負担感軽減が課題である。 今年度実施できなかった防災関係の行事を近隣の幼稚園、保育所と連携し実施する。	
		活動計画	活動計画の実施状況			学校関係者の意見
		I) 金融経済に関する消費者教育講演会を実施し、変化する金融情勢について興味関心をもって生活を営む力を養う。 ・家庭科の授業を通して、具体的な消費者トラブル事例からトラブル防止に役立つ知識を学び、知識を活用してトラブルを解決することができるよう学習する。 ・家庭クラブの活動を通してエシカル消費について学び、身近なことから実践する力を養う。 II) 主権者としての主体的な社会参画を促すことを目的に、専門家や関係諸機関と連携した出前講座等を実施する。 ・公民科の授業において、課題の把握、解決に向けた方策の考察、構想を促す授業を実践する。 III) 防災関係の行事を鳴門市役所や近隣の幼稚園、保育所と連携し、実施する。 ・普通救命講習が校内で受講できることを担任を通じて生徒に知らせる。	I) 1年次生の生徒を対象に、金融は個人の資産形成に関係する活動だけでなく、経済活動を活性化し、社会を豊かに発展させる役割があること等、金融の意義や役割について鳴門教育大学坂本氏よりご講演いただいた。 ・家庭基礎の学習において、金融商品を選択する基準について学習し、今後、生徒達が給与を得たときにどのように金融商品を選ぶか具体的に考えさせるなどして、学習内容の定着を図った。 ・家庭クラブの活動では、外部講師による日本の伝統的な食品である麺や保存食について学び、食品ロスについて考え、エシカル消費について実践する力を養うことができた。 II) 鳴門市議会議長及び議員を講師として、出前講座をHR単位で行えるよう計画したが、日程調整に難航し実現できなかった。 ・税の負担と配分の在り方を考えることを通して、公正、幸福、効率、正義など公共的な空間における基本原理、概念を習得する単元学習を構想、実践した。 III) 防災関係の行事を鳴門市役所と連携し実施した。近隣の幼稚園、保育所は実施する予定であったが当日天候不良のため実施できなかった。 ・一度に受講できる人数の問題もあり全生徒に知らせることはできなかったがボランティア学特講受講者と数名の希望者合わせて20名以上が普通救命講習を受講した。			将来納税者となるために、税金やお金の仕組みについての知識を伝える機会を設けて欲しい。

* 「評定」の基準 A：十分達成できた B：概ね達成できた C：達成できなかった